

本格的な受験シーズンになった。筆者の大学受験の時は、学園紛争で大学は封鎖状態であり、学外での、しかも突然の雪の中での受験であった。今も、センター入試の日など、つい天気が気になったりする。

受験に関するニュースも、年を経るにつれて見る視点が変わってきたように思う。子どもが教育を受けるようになってからは、親の立場から、興味深く見るようになった。

最近気になる言葉として、「学力低下」がある。ここ数年、特に目につくようになった。数学のできない理系大学生、複利計算のできない銀行員、などが例としてあげられている。ある大手予備校では、数年前と同じ問題の学力テストを実施して、統計的に比較するということまでしている。いずれにしても、学生の学力低下については、多くの人が認めているようである。

しかし、その原因と対処法を明らかにするのは、極めて難しい。いや、「学力低下」の意味するところについても、必ずしも明らかではないようである。国立大学は入試科目を増やす流れにあり、また、「ゆとり教育」の是非をめぐる議論も盛んであるが、「学力低下」問題はもっと深いところに根があり、教育だけでなく子育て全体にかかわるもののように思える。

親の立場になってみると、自分のころとのあまりの違いを痛感することが多い。

昔の子どもは、生きた自然との触れ合いの中で育った。筆者自身、友達と自然の中で泥んこになって遊ぶ毎日であり、そのことのおのずから、物事について考える力が育まれたように思う。また、ロケットやラジオの製作が好きであったが、そのような興味に引っ張られて、理科の勉強に自然に入って行けた。しかし今の子どもも多くは、偏差値という抽象的な目標を掲げて勉強に取り組み、遊びもテレビゲームなどバーチャルな世界に沈潜することが多い。

また、以前の学校は、教育の質はいろいろであっても、文字どおり勉強しに行くところであった。今の子どもたちは、学校の勉強だけでは受験戦争に勝てないと言われて塾に通う。塾は学校より進度を速め、親も学校に多くを期待しなくなる。そして、学校の先生の意識も、拡散していく。その結果、学校での授業を「無駄な時間」と感じる子どもが増える一方、勉強が不得手な子にとっては、学校はますます居づらい場所になっていく。

このような状況は、受験技術にたけた子どもたちを生み出す一方で、多くの子どもから、勉強に対する内発的な意欲と、対象を深く理解する力を奪っているように思える。問題は、単にカリキュラムの問題ではなく、子どもが生活する環境そのものや、社会のシステム全体と深くかかわっているものといえよう。

これをどこから解きほぐして行けばよいのか、今日本が直面している多くの「改革」と同様、難しい問題である。

ただ言えることは、自然および社会（自然環境、農村、農業、安全でおいしい食べ物を含む）との生きた双方向の関係を、今日の子ども社会の中に、新しい形で再生していくことが、欠かせない要素であるように思う。